

駄菓子屋模擬店にみる萩市の子どもに関する考察

八尋 茂樹, 国広 勝代, 石川 正一, 松岡 幸子

目次

- I. 問題関心
- II. 調査の概要とデータの収集
- III. 地域比較でみる子どもの購入傾向
- IV. 考察
 - 1 経済学的概念・視点の援用
 - 1-1 萩市の構造的資源の諸要素
 - 1-2 萩市の編成的資源の諸要素
 - 2 萩市の子どもの規範的特性
- V. 結びにかえて

Abstract

This paper points out the characteristic of children living in Hagi City. Elementary school students in Hagi City came under observation through several Dagashiya refreshment booths. The analysis of the fieldwork data indicates that they are stubborn, guarded, persistent and active in intimate situations. And they also have moral code of conduct. Two concepts in economics, “structural resources” and “organizing resources” are adopted here. Especially organizing resources of Hagi City, historical facts, symbiosis with nature and child-raising by elders and so on, are emphasized. Hagi City is said to be one of the fastest aging societies. This tendency is generally regarded as a negative image, but this paper concludes it has good effects on children in Hagi City.

キーワード：萩市 子ども 特性 駄菓子屋模擬店

I. 問題関心

本稿は、山口県萩市の小学生の駄菓子屋模擬店での行動を、静岡県藤枝市の小学生のそれと比較することから、萩市の子どもたちの文化的特性や規範に関する知見を得ようと試みた。これまで、子どもに関する比較研究は、主に国別、時代別、年齢別、性別、性格別などに限定されており⁽¹⁾、日本国内の地域別の比較調査は見当たらない。確かに、日本のどこに居住しても同様の情報を得ることができる高度なメディアの発達により、子どもたちの特性の同質化、均質化が一層顕著になってきているように感じられる。しかしながら、子ども生活学の教員である筆者らの直感では、萩市の子どもたちと他の地域の子どもの間には、何らかの差異があるのではないかと思われた。例えば、静岡県に長く在住した筆者（八尋）にとっては、萩市の小中学生が、自動車が

全く通らない道路であっても、あるいはわずか2メートルの横断歩道であっても、信号が赤である限り決して渡らない姿を何度も目にし、萩市の子どもたちの中には、単なる「マナー」以上の文化的規範や秩序があるのではないかと強く感じた。そこで本稿では、萩市の子どもたちの特性を把握するための基礎的研究として、萩市と藤枝市の小学生をそれぞれ駄菓子屋模擬店に招き、参与観察を行うことによって子どもたちと店主（スタッフ）とのやりとりや行動を調査し、考察を重ねることとした。

II. 調査の概要とデータの収集

データ収集の方法としてはフィールドワークを採用し、ビデオカメラでの撮影及び児童に対するインフォーマルなインタビューデータの収集を試みた。これらのデータは、静岡県藤枝市での模擬店（2006年5月5日及び8月13日の計2回）、山口県萩市での模擬店（2007年7月14日、10月14日、10月28日、12月25日の計4回）において収集したものである。

調査対象児童は小学校1年生から6年生とし、駄菓子及びくじの購入方法は、現金か無料配布チケット（10円券10枚綴りの配布）のいずれかとした（表1参照）。

また、駄菓子及びくじの主な取扱商品は表2の通り。

静岡県藤枝市				
行事	開催日	参加児童数	取扱商品	購入方法
F-1	2006/05/05	87	駄菓子	現金
F-2	2006/08/13	98	駄菓子・くじ	現金・無料チケット ⁽²⁾
山口県萩市				
行事	開催日	参加児童数	取扱商品	支払制度
H-1	2007/07/14	28	駄菓子・くじ	無料チケット
H-2	2007/10/14	107	くじ	現金
H-3	2007/10/28	94	駄菓子・くじ	現金・無料チケット
H-4	2007/12/25	40	駄菓子	無料チケット

表1 駄菓子屋模擬店概要

駄菓子	くじ
うまい棒、きなこ飴、きなこ棒、粉末ジュース、フルーツ糸引き飴、モロッコヨーグル、みつあんず、甘いか太郎、こんぺいとう、ヤッターめん、三角くじチョコ、カレー味せんべい、フラワートップ菓子、すも太郎、ココアシガレット、花串カステラ、すき好き梅こんぶ、ラムネ 等	スーパーボール当て、プーさん文具当て、かわいい消しゴム当て、ディズニー時計&文具当て、マリーちゃん文具当て、ピストル数字合わせ、キーホルダー数字合わせ、ラジコン・プラモデル数字合わせ 等

表2 主な取扱商品名

子どもの特性を調査・考察するにあたり、彼らの行動や語りを採り上げたのは、経験的な命題を証明するためではなく、経験を産出させるための「経験に先立つ概念的命題」について読者にカテゴリーの結合関係を想起させるためである。すなわち、子どもとスタッフの相互行為により、規則がおのずから現れてくる（そして、その規則が破られる）ことの観察であり、ここから見出せられる規範的秩序や一般的期待を分析するためにデータを収集、使用した（西阪、1997、2001）。

Ⅲ. 地域比較でみる子どもの購入傾向

本節では、萩市と藤枝市の子どもの発話や行動を比較した際の、いくつかの差異を列挙してみよう。

まず、どのような種類の駄菓子を好むかという点において、藤枝市の子どもが和菓子系統も洋菓子系統もまんべんなく選ぶのに対し、萩市の子どもは圧倒的に洋菓子系を望んだ。萩市の場合、いわゆる「駄菓子らしい駄菓子」である和菓子系は、同伴した保護者が懐かしがって購入するケースがほとんどであった。

次に、藤枝市ではF-2において無料チケットを使用した子ども全員（23名）が全て使い切ったのに対し、萩市ではH-1で3名（28名中）、H-3で9名（71名中）、H-4で3名（40名中）と、チケットを全ては使わず、残す子どもも見受けられた。また、藤枝市では一度の訪問でチケットを使い切るのに対し、萩市では数回に分けてくじや駄菓子に使用する姿が確認できた。これは、現金使用の場合にも似た傾向が見られ、藤枝市では参加した子どもは全員、何かしらの駄菓子を購入したりくじを引いたりして帰ったが、萩市では幾度も店をのぞきに来るものの、ひとつも購入しない慎重な子どもも多数見られた。しかし、このような子どもも、スタッフと親しくなると次の行事には友人を新たに連れて参加し、安心してくじや駄菓子を購入していた。

また、藤枝市では700円という高価な商品（ラジコンカー）を購入した子どもが3人（36名中）見られたが、萩市ではひとりも現れなかった（205名中）。この商品は、50円のくじの特賞でもあり、両市ともにこのくじで当ようとする子どもがほとんどであったが、700円支払って直接購入したのは藤枝市の子どもだけであった。

萩市では自分のお目当ての商品が当たるまで10円から50円のくじを引き続ける子どもが男子3名、女子5名（205名中）いたが、藤枝市では全く見られなかった（61名中）。平均使用金額も藤枝市が420円であったのに対し、萩市は220円と大きな開きがあった。また、藤枝市では千円札を使用した子どもも珍しくはなかったが、萩市では保護者同伴以外の札の使用者は全くいなかった。これに関連して、藤枝市では保護者が子どもにお札を渡したりする場面も多く見られたが、萩市では必要な額を保護者がその都度支払うか、子どもに手渡す場合は必要な額（数十円から100円）だけであった。

その他、チケット配布による宣伝後のリピーター率は、藤枝市（F-1→F-2）では26%（23/87）であったのに対し、萩市（H-2→H-3）では48%（51/107）と非常に高かった。

また、行事終了後、藤枝市での模擬店ではF-1、F-2共に、店の近辺に駄菓子の袋や串、ラムネのペットボトルなどが散乱していたが、萩市では、H-1、H-3、H-4の3回とも、紙くずなどのゴミはゴミ箱に捨てられ、ラムネのボトルはスタッフに丁寧に返却されるなど、著しく規範意識が高かった。

萩市と藤枝市の子どもに共通して見られる購買傾向として、駄菓子とくじが並んでいる場合は、手持ちのお小遣いやチケットのほとんどをくじの方に費やすという点が挙げられる。食よりも物を優先させる子どもの姿に地域差は見られなかった。無料配布チケットでの購入の際、残りの額ではくじを引くことができなくなった子どもが、仕方なく駄菓子と交換している姿が目立った。ただし、両市とも子どもが駄菓子を好まない訳ではなく、無料で配る駄菓子には手を伸ばし、多くが嬉々としてその場で食べる姿が見られた。

IV. 考察

1 経済学的概念・視点の援用

本稿の分析において有効と思われる概念は、Wallman（1984）の「構造的資源（structural resources）」と「編成的資源（organizing resources）」であろう。構造的資源とは、いわゆる生産要素（土地、労働、資本の3つの財）を中心とした、不平等分配されることのある社会的資源であり、それに対し編成的資源とは、家族や文化、価値観など、誰でも利用可能な社会的資源のことである。つまり、萩市が持つ構造的資源の要素を縦糸、編成的資源の要素を横糸として編むことによって生成される独自のコンテキスト上で、萩市という社会に帰属する子どもたちの行動をどのように読み取るかが本稿の課題となる。そこで、まずは萩市の消費社会における構造的資源と編成的資源となりうる要素をいくつか概観してみよう。

1-1 萩市の構造的資源の諸要素

萩市街の子どもの消費文化を、構造的資源の視点から捉える際に最も注目されるべき事柄は、コンビニエンスストア（以下コンビニ）のあり方である。街の規模に比べ、比較的多いにも関わらず、小中学生の単独での利用はほとんど見受けられない。谷田貝（1998）の小学4年、6年対象の調査では、コンビニの利用目的を「食べ物、飲み物を買うため」という回答が圧倒的に多い。大規模な都市だけでなく、全国的に見ても中規模な街においても、小学生はお菓子やジュース、玩具類（トレーディングカードなど）を購入するために、コンビニを頻繁に利用する。また、徒歩や自転車などで塾通いする子どもの中には、塾の前後にコンビニで「買い食い」をすることが多い。しかしながら、萩市の主な6店舗⁽³⁾を観察してみても、平日夕方以降及び週末において小学生単独での利用は少なく、見かける場合も保護者が利用する際について来ているケースがほとんどである。この傾向は中高生にも見られ、他の街のように部活動帰りなどにコンビニでたむろする姿はほとんど見られない。

また、萩市街には大手ファーストフード店は2店舗と少ない⁽⁴⁾。この2店舗に関しても、高校生以上の若者は休日に単独で利用している姿を見かけるものの、小中学生は保護者同伴のもとに来店しているケースがほとんどである。

萩市は鉄道がデルタ（三角州）を通過せずに外側を通っており、萩駅と東萩駅が街の中心部から外れた場所に位置している。このため、ステーションビルが発達せず、他の都市のように、通勤通学途中にコンビニやファーストフード店を利用する習慣が萩市民にはない。子どもたちにとってもこれらが、かつての駄菓子屋のような存在として生活領域内に存在せず、日常的に利用する場所（ケ）ではなく、保護者が特別に連れて行ってくれるハレの場となっている。すなわち、子どもたちにとって日常の中のカフェ的、サロンの場が萩市街には存在しないと言える。しかし、萩の子どもたちがケとしての場を求めているわけではない。商店街が直営する駄菓子屋の近くに居住する子どもたちは、放課後や休日に利用している⁽⁵⁾。

1-2 萩市の編成的資源の諸要素

次に萩市民の消費生活の編成的資源を考える場合、最も注目すべきは人口構成の特性であろう。萩市は年少人口率（15歳未満の子ども世代）及び生産年齢人口率（15歳から65歳未満の働く世代）が極めて低く、一方で高齢人口率が全国上位の街である⁽⁶⁾。高齢者中心の歴史的な街には、子どもや若者向けの店を構えにくい。また、同じように年少人口率の低い東京都は、生産年齢人口率が高く高齢人口率が低いいため、子どもたちが帰宅しても家には誰もいないことが多く、ひとりでコンビニを利用したり、外食したりする機会が自然と多くなる。しかし、萩市の子どもの祖父母母との同居率が高く、その日のおやつや夕食に困るようなこともない。

次に挙げられるのは歴史と文化、自然である。萩市は歴史上、奇跡的に天災や戦災を受けることなく今日まで来ており、それゆえに「まちじゅうが博物館」⁽⁷⁾と自負する歴史的風土に満ちている。また、指月山、菊ヶ浜、笠山と観る者を虜にする自然にあふれるなど、これらの要素によって落ち着いた教育環境を保持している稀有な街であるといえよう。しかし、興味深いことに、萩市民はこの特性に対する自尊心を「都市発展から取り残された街」と謙遜的に表現する傾向にあるといわれる（菊屋、1973）。

2 萩市の子どもたちの規範的特性

駄菓子模擬店で見られた萩市の子どもたちの姿は、このような構造的資源と編成的資源がクロスしたところに置くことができよう。

「何度も覗きに来て迷っても、結局買わない子ども」、「チケットを全部一度に使い切らない子ども」、「高額な商品を衝動的に買わない子ども」、「ゴミを散らかさない子ども」の姿は、教育環境の整った街、年配者の教えが届きやすい街を反映しているかもしれない。あるいは、「親は子どもに過度に買い与えない」、「子どもに大金を持たせない」傾向も、父親や母親がかつて祖父母の躰を受けて身に付けた規範意識を持ち、孫はその両者から金銭感覚や慎重さについての躰を受ける環境にあるとも考えられる。

孫と祖父母の距離関係も重要であろう。現代は核家族化が加速した家族形態であり、めったに会うことのできない孫に祖父母は甘くなりがちである。ゆえに、子どもは母方、父方両方の祖父母、そして両親からお小遣いももらうことができる「シックスポケット」の時代と言われる。これは祖父母との同居率の低い藤枝市の子どもたちが、お札を持ち合わせていたり、躊躇なく使用したりする傾向と重なるところがある⁽⁸⁾。しかし、祖父母との同居率が高い萩市では、いつも一緒に過ごす孫にはお小遣いを与えすぎない傾向にあり、両親もその流れを汲んだ経済観念を持ち合わせているとも考えられる。このように、「高齢人口率の高さ」や「祖父母との同居率の高さ」といった編成的資源と、萩市の子どもたちの特性との間には、何らかの関係性が見出せそうである。

それでは、「当たるまでくじを引き続ける子ども」や「一度参加した子どもは次も参加する（リピーター率が高い）」という特性は、どのように解釈すべきであろうか。「萩にはこんな面白いところはあまりない」、「またやって欲しい」という多くの発言は、萩市の構造的資源における「子どもにとってのカフェ的な場の欠如」を直に反映していると言える。しかしまた、そのような遊戯的な魅力に取り付かれたからだけではなく、彼らの中に粘り強さや拘り、あるいは情がわくと積極的な友好関係を持つといった性質をも見出すことが可能であろう。

萩の子どもが「和菓子系を積極的に選ばない」理由はどこにあるであろうか。高齢者は洋菓子よりも和菓子を好む傾向にあり⁽⁹⁾、萩市在住の子どもたちにとって抵抗のないものという研究当初の予想は大きく覆された。藤枝市で和菓子系に興味を持った子どもたちは「何これ？」とスタッフに説明を要求し、その後面白がって購入していた。萩市も藤枝市も近年、伝統的なお菓子を食べるよりも、スナック菓子を選択する傾向にあると思われるが、両市の子どもたちの行動には隔たりが見られたことから、萩市の子どもには、見たことのないものへの「慎重さ」や好きなものを迷わず選ぶ「拘り、頑固さ」があるとも考えられ、この特性が萩市の文化的・教育的規範という編成的資源と関わりがあるとも考えることもできよう。

V. 結びにかえて

中根（2006）は、構造的資源を「非人称的資源」、編成的資源に対しては所有格を持った「人称的資源」と呼んだ。昔、「萩ちうところはつまらん町であります。工場もないし煙突は火葬場の小さいのが一本ある位で発展のない町で見るところもありません」と萩の人が自ら卑下したという記録があるように（菊屋、前掲）、今も経

済の遅れや若者の流出を嘆く声は聞かれる。確かに萩市は超高齢社会である⁽¹⁰⁾。しかしながら、そのような非人稱的資源の負の影響よりも、歴史や文化、高齢者の教えといった人稱的資源の効果に焦点を当てなおすと、萩固有のアイデンティティが見えてくる。現代社会にありながら、萩の子どもたちが極めて高い規範意識を持ち合わせている特性は、この超高齢社会の誇るべき正の遺産ではないであろうか。ゴミを捨てない子どもたちを知れば、萩という街が他の都市に比べ、驚くほどゴミが街に落ちていないことも納得できよう。子どもの頃から金銭感覚が身につけているため、容易に消費しない、お金を落とさない気質であるかもしれないが、慎重に、警戒して覗きに来る人をも惹きつけることのできる店をつくれれば、彼らは強力なりピーターへと変貌し、非常に繁盛する店も出てくるであろう⁽¹¹⁾。今後、萩市という街の発展は、萩の編成的資源から生成される固有のアイデンティティを、これからも子どもたちに肯定的に受け継がせ、強化させることに見出せるのではないかと思われる。

付 記

本研究は、平成19年度山口福祉文化大学学長決済研究費助成を受けての研究の一部である。

註

- (1) 例えば、国別として井上比呂子（2007）『小学生の自己概念尺度の検討：日米比較を通して』日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集、時代別として山岸明子（2006）『現代小学生の約束概念の発達：22年前との比較』教育心理学研究、年齢別として向井敦子（2005）『小学生における不利益を被る状況に対する対人態度：大学生、中学生と比較して』大妻女子大学人間関係学部紀要、性別として浜名涼子他（2004）『福岡県内の小学生を対象とした食生活と自覚疲労調査：学年・男女の比較』福岡女子大学人間環境学部紀要、性格別として井上まり子（2002）『"ひとりでもいい"と答える小学生の人間関係：友だちの多い子どもとの比較による検討』性格心理学研究、などが挙げられる。
- (2) F-1の行事に際して来店した子どもは、F-2用の無料チケットが配布された。同様に、H-2参加の子どもにはH-3用のチケットが配布された。H-1及びH-4のチケットはその場で配布した。
- (3) セブンイレブン（萩橋本町店、萩反射炉前店）、ローソン（萩川島店、萩椿東店）、ポプラ（松陰神社前店、萩椿店）。
- (4) マクドナルドとケンタッキーフライドチキンが撤退した後、ミスタードーナツとモスバーガーの2店のみとなった。
- (5) 田町にいっぷく堂という駄菓子屋が運営されている。また、高校生以上は、カフェ的な場としてファミリーレストラン（ジョイフル及びガスト）を利用しているが、ケとしてではなく、ハレに近い存在である。
- (6) 比較対象としている藤枝市は、この3つの人口率においていずれも全国平均に当たる。
- (7) 萩市長のことば。野村興兒（2003）「まちじゅうが博物館 萩」『市政Vol.52』全国市長会。
- (8) 藤枝市の駄菓子屋模擬店に参加した子どもたちは、社宅やアパート在住の、核家族の属性をほとんどが持っていた。
- (9) 「世帯主年齢別に見た消費パターン」『お菓子何でも博物館』日本菓子工業組合連合会（<http://www.zenkaren.net/seisan/nenreibetu.html>）。
- (10) 高齢人口率（65歳以上）が7%を越えると高齢化社会、14%を越えると高齢社会と呼ばれる。萩市の高齢人口率は31.6%と極めて高い。（『生活ガイド.com』<http://www.seikatsu-guide.com/area/>）
- (11) 現在、萩市でこの条件を最も満たしている店は、パチンコ店であろう。

参考文献

- 1) 菊屋嘉十郎 1973、「城下町萩の町並保存の経過とこれから」『建築雑誌 Vol.88』日本建築学会。
- 2) 中根成寿 2006、『家族ケアを構成する二つの資源：知的障害者家族におけるケアの特性から』立命館人間科学研究。
- 3) 西阪仰 1997、『相互行為分析という視点』金子書房。
- 4) —— 2001、『心と行為』岩波書店。
- 5) 谷田貝公昭 1998、『青少年の生きる力を育てるための総合研究』一藝社。
- 6) Wallman S. 1984, Eight London Households, Tavistock Publications Ltd.

謝 辞

駄菓子屋模擬店の運営において、藤枝市では日本女子大学の学生、萩市では山口福祉文化大学の学生及び山口県立奈古高等学校の生徒有志、椿西児童クラブの先生方の協力を得ました。ここに感謝の意を表します。